日本海新聞

潮流

本年4月24日、日本海新聞は「地方疲弊の原因追及を」と題した社説において、鳥取県の急激な人口減少の要因を国の制度に求めて『地方を疲弊に追いやる〝真犯人〟をもっと追及しないと解決しない』と結んでいる。空き店舗の利活用を任務として県中部に住んだ2年の経験から、出しゃばりを覚悟して、多少付け加えたいことがある。

NPO法人未来地域マネジャー　光森　明

気概

疲弊の原因を『地方のヒト・モノ・カネを都市部へ引き上げる政策』に求めるのもその通りだが、同時に、全県を覆っている精神的疲弊ともいえるモノを見つめなければならないと感じる。

私の携わっている倉吉に限定して例えれば、観光エリアでの関心事は、年間の来客者数増減であり、お金の落ち様にある。来るか来ないか受け身の毎日であり、受け身でいる限りは、各店舗それぞれに工夫を凝らしてはいても精神の健全さは保てない。

山陰の小京都と呼ばれるこの地域は、かつて糸偏産業を興し、稲扱き千刃などの農機具を全国に普及させた土地であった。積極的に世の中に挑む進取の気風に満ちあふれていた土地なのだ。それがどこかで間違ったとは言わないまでも、積み重ねられた気風のDNAが影を潜めたままでいる。

私は何よりもまず、この地にかつて満ちあふれていた気風がなぜ失われたのかを追求すべきだと思う。自前のエネルギーを燃え立たせるべきだ。それには何か揺るぎない言葉を全国、いや大げさでもなく世界に発信するのが早道だと考える。

極端な例えだが、「わが県は、日本海は断固として日本海であり、東海の呼称は認めない。竹島は山陰地方を彩る諸島の一つであり、日本の領土である」と宣言すれば事は大きく前進しないだろうか？　何しろ目前に広がっている大海原が舞台なのだ。国政の体たらくに倣って県政までもが体たらくであって良い訳はどこにも存在しないし、県民も避けてはならない。

歴史的・国際法的にも紛れない正当性を持った事柄なのだ。航路空路によって国内では身近に接する機会を一番多く持っている鳥取県民であればこそ、国内における率先垂範の行動をとるべき立場にいることを自覚すべきだ。今後将来に物資物流、観光交流で期待している相手ではあったとしてもこびへつらうことは些かもない。言うべきことは明確に言い、筋も通した上での付き合いをすべきなのだ。

県の北東アジアゲートウエイの推進も外国人観光客を倍増する構想も、その根底に確固とした姿勢がなければ砂上の楼閣に等しいといえる。東日本大震災でうつむきがちな気持ちに覆われている今こそ、鳥取県ここにあり！の気概の声を挙げるときでもある。

人が土地から離れるのは、土地にオーラが漂っていないからだ。私は、だから鳥取県の人口減少を止めることを目指すなら、どこよりもそこに住み、子を産み、子を育て上げ、人生の幕を閉じるに魅力的な〝気概〟という名のオーラの漂いをまず求めたい。

その上で、例えば、県内外への進学者に鳥取定住を前提条件とする全額給付の奨学金制度を打ち立てたりすればよほど確率の高い移住定住策にならないだろうか？　新参者の戯れ言と聞こえたとしても、しかし、鳥取県の人口減少に限らず全ての行き詰まりを打破する糸口にはなるはずだ。

ともあれわが鳥取県には、内向きの耳に心地よいキャンペーンや百花繚乱の施策であったりよりも、県民の心を突き動かし奮い立たせる〝気概〟のある一言こそが今必要とされていると思うのである。

（湯梨浜町）